

議 事 録

- 会議名 第19回佐賀県総合教育会議
- 開催日時 令和3年3月24日（水曜日）11時～12時
- 開催場所 佐賀県庁新館4階 プレゼンテーションルーム
- 出席者 山口知事、落合教育長、牟田委員、小林委員、加藤委員、飯盛（清）委員、
飯盛（裕）委員
（知事部局）進政策部長
（総合教育会議事務局）大草政策調整監、他
- 議題 （1）校則と指導（第15回テーマ）について報告
（2）令和3年度の重点的な取組について意見交換

○議事録

1 開会

（大草政策調整監）

これより第19回佐賀県総合教育会議を開催いたします。本日、司会を務めます政策調整監の大草と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、開会にあたりまして山口知事から御挨拶をお願いいたします。

2 あいさつ

（山口知事）

冒頭ですけれども、本当に残念なニュースが飛び込んでまいりました。佐賀県出身の古賀稔彦選手が53歳という若さで亡くなられたということで、心から御冥福をお祈りしたいと思います。うちのSSPの委員になっていただいている、本当は今度の聖火リレーも佐賀県を走っていただけるということであったので、本当に残念でたまりません。県民栄誉賞の第一号ということで、心から御冥福お祈りいたします。

それから、今週の月曜日に萩生田文部科学大臣にお会いしてきました。2つ案件があったのですが、特に1つ目は、高輪築堤の保存について、大隈重信侯が主導した鉄道。私たちが山手線で普段通っていたあれを、高輪ゲートウェイという駅を作るということですけれども、外側にずらして再開発をする手筈になっていて、そしたらそのまま150年も前のものが残って出てきて、我々佐賀人としては、是非保存してほしいということで大臣と意気投合いたしまして、これから1年程やっていくということで、実はこの4月から一緒にこういう研究をやるので、こちらから文科省の方へ人を送ってくれという話があって、今もう決まったからもうすぐ送るということで、非常に文化という事に関してこれから文科省さんと連携しながらやっていこうと思います。

もう一点は、宇宙の話でJAXAとの連携でさまざまな地方創生との関係で、これから一緒に同調してやっていこうという話も出させていただきました。ということで、いろいろ新しい動きもありますし、これから佐賀県が本来もっている素晴らしさというものをしっかりと打ち出していけるということ、今日特に新年度の重点的な取り組みということで、教育委員さんも皆で話し合いながら、いろいろ「らしさ」というのにこだわったと聞いておりますので、そういった話も伺いながら、我々の方の予算というのもご紹介しながら意見交換させていただきたいと思います。コロナで1年前を思うと、

ずっとこの対策を毎日我々やっておりますけれども、本当に教育現場も大変だと思いますが現場で頑張っておられる皆さん方に、心から敬意を表したいと思います。今日はよろしくお願いいたします。

3 内容

(1) 校則と指導（第15回テーマ）について報告

(大草政策調整監)

ありがとうございます。それでは本日の議事に入ります。第15回テーマ「校則と指導」についての報告と、令和3年度の重点的な取組について意見交換をお願いしたいと思います。

まず、報告事項についてでございます。校則と指導について第15回でテーマといたしました。その後の状況について落合教育長から御説明をお願いいたします。

(落合教育長)

令和元年11月の第15回の総合教育会議で、校則について意見交換をさせていただきました。その後、今の時代に合っていない校則があるのではないかとということで、ちょうど1年前の令和2年3月に全県立学校に、見直すようにという通知を出し検討をしてもらいました。8月に中間確認をしたところ、なかなか見直しが進捗していなかったのも、改めて11月にも考え方を示して、今年度中にまとめるようにということで取り組んでいただきまして、令和3年2月末で全県立学校から取りまとめております。特に「人権にもとるような校則になってないか」あるいは、「生徒や保護者の意見もしっかり聞いてやっているか」そういった点で、各学校にこちらの気持ちを伝えながら見直してもらいました。その結果、「人権を保障したものになっているか」「社会通念上合理的と認められるようになっているか」「必要最小限のものになっているか」「実社会で必要となる規範意識醸成となるか」「教育目標の達成のため適切なものになっているか」という観点で見直してもらってます。その結果かなりこれはどうかなと思うようなものは削除されたり、適正化が図られたのではないかなと思っております。そういう中で、一番下の服装とか身だしなみに関わる規定というのは、まだそれぞれ残っている部分もあります。これもかなり適正化されていると思いますけれども、そこは保護者とか生徒の意見を聞きながら今回はまとめてもらっていますので、かなり県立学校の校則の全体としては適正に出来たんじゃないのかなと考えております。今後も引き続き各学校の方には、その時代時代に合った校則にするように伝えていきたいと思ひますし、「唯一無二の学校づくり」これから言っていきますので、学校づくりに合った校則を各学校でしっかり議論して考えてもらいたいと思ひます。以上です。

(大草政策調整監)

ありがとうございます。報告いただきましたが、他にご発言等ありませんか。

(山口知事)

この後の唯一無二じゃないけど、一律で同じような校則にするなんてナンセンスで、みんなそれぞれが考えながら何であるんだろうと、やっていくということが大事。

(落合教育長)

校則はほとんどないようなところがあっていいと思ひし、逆にきちっとした校則を売りにすると

ころも出てきていいのかなと思います。

（飯盛（清）委員）

いいきっかけになると思います。学校側が言いたくても言えないところもある。というところも必ず忘れず、何かしていただきたいと思っております。

あともう一点、毎年が理想ですけれども、生徒が入れ代わると見直した趣旨が、新しく入ってくる生徒には分からないままになるので、定期的な見直しというのが必要だと思います。

（大草政策調整監）

この件については、よろしいでしょうか。

（落合教育長）

今、御説明したのが県立の取組みなんですけれども、弁護士会からの提案が中学校の校則なんです。市町の中学校の方にも県立のこういう取組について伝えています。完全には取りまとまっていますが、それぞれにいろいろ取り組んでいただいております。

（山口知事）

自発の地域づくりじゃないけれども、それぞれが自分の頭で考えていろんなことをやっていくのは、いい方に行く。そうしないと守ろうとか責任とかいろんなものになってくるので、そういうの見習って。

（２） 令和３年度の重点的な取組について意見交換

（大草政策調整監）

意見交換のテーマでございますが、「令和３年度の重点的な取組について」でございます。新年度に向けて予算に込めた思い、取組の目的・内容について共有が出来ればと考えております。まず私の方から、知事が令和３年２月の記者会見で発表いたしました予算の中で、教育関係について御説明させていただきます。

まず、少人数学級を実現する取り組みですが、小学校の少人数学級については、国において令和３年度から小学校２年生まで実現できる制度が導入をされるということになります。佐賀県においては、既に小学校２年生までの少人数学級の導入が実現しております。それに加えて、全国に先駆けて県独自に小学校３年生までを対象に、少人数学級を導入するための予算がこちらでございます。

次に、特別支援学校についてですが、知的障害のある方など、特別支援学校で学びたいという方、これを希望する方が増えているという現実がございます。一方で教室が不足しているという課題がございます。そこで県東部の拠点であります中原特別支援学校におきまして生徒数の増加に対応して、きめ細やかな教育を実現するため、教室を増設することといたしております。そのための予算がこちらでございます。

次は、２本ございますけれども、コロナ渦においてもしっかりとした教育を受けてもらえるように、県立の高校ではオンライン教育を進めるということで、「プロジェクト E」というのに力を入れて参りました。これまで県立高校においては、全県下で１人１台の端末というのが実現しておりますが、今回全国でもいち早く私立高校においても１人１台端末の整備を支援するというので、教育環境の充実を図っていくというのが、上のほうでございます。それから下の方ですが、高校の産業教育設

備、こちらを最新の機能を搭載したものに一新するという事で、実践的な人材教育に力を入れていくというものです。高校生の県内就職率を65%以上に引き上げようと「プロジェクト65」というものに取り組んでいますが、更にこういった取組を推進する力にもなるのではないかと考えております。私の方からは以上でございます。

続きまして教育長から御説明お願いいたします。

(落合教育長)

教育委員会の取組を御説明いたします。来年度、教育が直面する課題に正面から取り組むために3つの重点プロジェクトに取り組んでおりまして、「唯一無二の誇り高き学校づくりプロジェクト」、「プロジェクトE+（プラス）」、「部活動改革プロジェクト」、この3つについて取り組みたいと考えております。

まず、「唯一無二の誇り高き学校づくりプロジェクト」ですけれども、それぞれの学校が持つ魅力とか強みを徹底的に磨き上げて、それを積極的に情報発信して県内外からの生徒募集を進めていくということなんですけれども、情報発信も積極的に生徒募集するということは、これまで県立が全く得意にしていませんでした。私立は当然ながらこういうのに力を入れてきている訳ですけれども、危機感をもった意識改革が大事だと思います。そういうことで、唯一無二の学校づくりをしていきたいと考えております。

次が「プロジェクトE+（プラス）」ということで、コロナ禍の中でプロジェクトEということで、オンライン教育に取り組みましたけれども、今回国のGIGAスクール構想もあって、市町も全て揃うことになります。そういった環境を活かして授業を変えろというのと教育活動を変えていくという、両面していきたいと思っております。小中高揃う全国おそろく最初になるのではないかなと思いますけれども、小中高揃うということで、その環境を活かして学力の向上にも努めたい。まずは英語力をつけていきたいと思っております。

3番目は「部活動改革プロジェクト」。部活動に関してはいろんなことが課題と言われてはいますが、そういった中で、これまで学校の中で取り組んできた部活動を地域としっかり連携してやると、やりたいところはしっかりやって頑張る。あるいは重荷になっている子がそこまでやらなくても楽しめるような、そういった部活動を取り組みたいと思っております。いろんなパターンがあるんですけれども、高校と中学とおおよそ違うところがありますが、学校の部活動を拠点として地域に広げていく。あるいは地域に拠点があるところに、いろんな学校が集まってくる。あるいは中学で言えば、その学校ではなくていろんな学校が一緒になってやっていく、そういういろんなパターンがあると思いますけど、そういった中に教職員がどう参加できるか、あるいは外部の人にどう協力してもらえるか、そういう方向でしっかり取り組んでいきたいと思っております。

次に、その誇り高き学校づくりに関連するんですけれども、「地域とつながる高校魅力づくりプロジェクト」というので、昨年度から取り組んで3年間事業としてやらせてもらっています。白石高校をモデル校として門田さんという、この方中学校教師で駅伝を指導されていた方で、白石の中学高校の駅伝を強くされた方なんですけれど、その方にコーディネーターになっていただいて、地域に沢山の教え子がいらっしゃるの、役所とか経済界とか、あるいは小中学校にも顔を出していただいている。そういう人が中核になっていろんな人を巻き込んで、この学校づくり取組む。そういうのをモデルにさせていただいています。それと合わせて全体で8校ですけれども、神埼とか伊万里とか有田・嬉野、他にもいくつかやっていますけれども、こっち側は地域でまちづくりに取り組んできていらっしゃるキーパーソンに、学校の中にも参加してもらって連携して学校は地域とつながりを持っている、

そういう取り組みをやっております。現在、白石も合わせて8校でやっていますが、これは唯一無二の学校づくりの中で横展開していった、どの学校もこういう意識が必要なのかなと思っております。

次に、これは大草政策調整監からあったんですが、実業系の学校で実習用の機材がかなり老朽化しているところもあって、今回一気に予算を付けていただいて、補正予算と当初予算を合わせて18億円ぐらいかけて機材を更新することに、デジタル化という観点で実践的な教育を県立高校でやるということでさせていただきました。こういった子どもたちが、プロジェクト65じゃないですけども、地元に残って活躍できる人材を育てていきたいなと思っております。

(山口知事)

さっきの機械とかもそうやもんね。実際使っているものと全然違うもんね。

(落合教育長)

工業系の高校だと、昭和時代の鉄工所の機械と同じような感じだったので。これでかなり変わってくるんじゃないかなと思います。

(山口知事)

介護もいいね。実際は、電動なのになんで無かったのかと思ったもんね。

(落合教育長)

基本を学ぶのには、よかったんでしょうけど、こういうのはやっぱり今後必要だと。私からの説明は以上です。

【意見交換】

(大草政策調整監)

ありがとうございます。ここから意見交換に入りたいと思います。度々御紹介しておりますが、「唯一無二の誇り高き学校づくり」というのが前回のテーマで、方向性を共有させていただいたのかなと思っております。それで、今回それを後押しするような予算になっているのかなと思いますが、こういったことについて、御意見をいただければと思います。

(山口知事)

私たちのもともとの問題意識として、やっぱり私立学校は建学の趣旨とかいっぱいやってるのに、別に県立〇〇高校とか、全部同じでやる必要が全くなくて、佐賀県が作ったからそんなもの管理しようなんてさらさらなくて、それぞれが独自性を出していくという姿にならないかなと、この会議でも話していたら、さっきのローカリストを使ったりもそうだし、だからGMでも市町の首長さんに県の学校とか思わんでいいよと、皆さんの地域で「嬉野高校は嬉野高校で大事にしてね」と、「三養基は三養基高校でやって」と言ってたんで、何か歩調が合ってきた感じがして、さっきの校則もそうだけど、それぞれ自分の所で考えていく個性が出てくることはとってもいいし、子どもが誇り自分の学校であると思ってくれるんじゃないのかなと期待しているんですけど。

(落合教育長)

それぞれいいところ沢山あるんで、そういうのをどんどん表に出してってもらいたいなと思います。

(飯盛(清) 委員)

今の知事のお言葉をですね、直接県立の校長先生方に伝えていただくと、きっと勇気がでると思います。やはり教育長からとか学校教育課長からいうよりも、知事の思いを直接伝えてもらえる機会があればなと思います。

(落合教育長)

新採教職員には、知事から直接お話がありますが、校長先生へ直接というのはなかなかないですね。

(山口知事)

新採には、最近毎年言っているんだけど、知事が言ってたからと新採が校長にいきなりというのは。校長会とかあるじゃないですか、長崎県にいた頃は、県立学校と私学の校長先生の交流会があって、そこに呼ばれて行ったりして。

(落合教育長)

実用的な会議に、私も時々飛び入りで行って話させてもらってるんですが、ぜひお願いします。

(青木副教育長)

今、校長先生方も一生懸命になって、何とかせないかんという雰囲気にはなっています。

(山口知事)

私、嬉しかったですよ。伊万里だったっけ。いろんな会合で生徒が司会する。

(落合教育長)

伊万里農林ですね。

(山口知事)

何で決まりきったように、どこに呼ばれても式典が、教頭先生が司会をして全部同じパターンで、自分たちが 100 周年とかお祝いするのに、生徒たちが自主企画で、失敗したってなんでもいいから。

(落合教育長)

その校長は、清水の舞台から飛び降りるような気持でされたのではないのでしょうか。

(山口知事)

だって社会に出たら、私たちも含め失敗の連続なので、むしろその時にどうしようかと改善したりとか、そういうことも含めて私は教育だと思う。

(落合教育長)

それは生徒がしっかりした、モデルになるんじゃないですか。

(飯盛(清) 委員)

別の件でよろしいですか。唯一無二の来年度の3年生までの県独自の35人学級ですがけれども、これも県独自というところを校長になるんでしょうけど、現場でしっかり伝えてほしいなと思います。教員というのは視野が狭くて、例えば自分の学校にいても全部の学年には関係ないことがあるんですね。だから、そこの担任になったものには響きますけれども、他の担任は分からなかったりすると。だから、それをしっかり伝えていくことと、それを伝えて理解されると、じゃあ来年はどうなるのとか気持ちを持つと思うので、ぜひ来年も先取りして進めていただきたいなと思いますので、よろしくお願いします。

(牟田委員)

問題提起を1つさせていただきたいと思います。うちの方の問題になると思うんですけど、各高校がちゃんと独自のやっていいんだけど、校長先生だと思んですけど、やっぱり2年ぐらいで変わっちゃうじゃないですか現実には、その校長先生が「えいや」と、私の時にこう変えると、こういうことを打ち出せる勇気というか出来るかということ、現実的にはなかなか厳しいのかなと思います。だから飯盛(清)委員がおっしゃるように、知事が現場に行って「こうやっていいんだよ」と言ってくだされば勇気を出せる校長も出てくるのではないのかなと。

(山口知事)

確かに。やっぱりある程度、時間がかかるよね。行って直ぐに、知事の仕事ですらある程度の時間をかけながらこう変えていく。必要だよ時間ね。それを校長先生がいきなり赴任して直ぐに、私立だったら出来るけど、県立で異動が短い中でって難しいよね。

(落合教育長)

先生たちもホームグラウンドをもう少しはっきりさせて、そこの学校のことを良く分かって校長になる時は、思いがいっぱいになっている。校長になってからの時間はそこそこあるような形に、人事戦略的な大きな視点を持つようにしたほうがいいのかなと。

(牟田委員)

今の話でいくと、校長がきて2年ぐらいでこの高校はこういう風にしたいとやりだして、次の校長はいや違うというのがあり得るだろうから、やっぱり5年か10年の期間で、こういう風にやるんだというのを持たないと難しいのかなという気がします。

(山口知事)

県庁でも同じポストになるという人はいるもんね。変えてきたもんね。当然のように何年したらってやってたけど、やっぱり適した仕事というのがあって、いい仕事をして県民のために役立っているんだったら、無理くり変える必要もないので。

昨日の農業の改良普及員もそういった話も、ずっともんだ症候群のようなローテーションをしてみたいけど、本当にそれでうちの農業政策がしっかり根付くのかなと。そういった所もぜひ教育

長さんたちの方でお考えになられたらいいんじゃないのかなと思います。

加藤委員さんもずっと同じ所の校長だから、それで積み上げて試行錯誤してやっていくところもあるんじゃないですか。

（加藤委員）

そうですね。やっぱり学校の教育指針という、その思いを伝えていくという事は、凄く大事なかなと思います。うちも現場がどれだけ吸収してくれてるのかなというところがあります。この唯一無二の誇り高き学校づくりプロジェクトが、本当に成功してほしいなと思ってのるんですよね。そして、その現場で働く教員の人たちが横繋がりで、例えば介護とか、有田工業とか、そこに協力出来るような体制を何か作っていただけると、学校全体が盛り上がっていく。担当者だけが一生懸命するというのがなくて、というのが大事なんだろうなと思います

（落合教育長）

さっきの、牟田委員さんが言われたことからすると、地域と一緒に学校を作っていくとなると、校長が変わったから考え方が変わるとはならないのではないのでしょうか。

（小林委員）

佐賀県では、コミュニティスクールを取り込むことで地域のみんなにわが町の高校だと地域の人たちが思ってくれと、管理職が代わっても先生が代わっても、その高校はこういう学校だというのをみんなで支えていけるので、そういう所も地域と一緒にするのは大事なかなと思います。

（山口知事）

今、県職員との意見交換の時に高校の名前を聞くようにしている。「何高校の何とかです」とか、みんなそうやって雰囲気が出てくるから。

（飯盛（清）委員）

中学生までは、地域との交流というのは、どっぷりという程結構あるんですよね。高校になると通学距離が離れるというか地域とのつながりがなかった。だから、そういった取り組みをすることで、65.5%が県内に残って何かやってみようというところにも、繋がる可能性もあるのかなという気がします。

（山口知事）

いい循環になっていけば、地域に残ってそこで何かする。また結婚して子ども産んで、いいサイクルが生まれてくれば。

飯盛（裕）委員、アメリカとか地域との密着性とかあるの。

（飯盛（裕）委員）

結構あります。学校が地域とボランティア活動をして、ビーチのゴミ拾いとかして、そういう所をPR じゃないですけど、やっぱりホームページとかでこういうことをしましたと、そういう活動も地域のニュースで流したりしているので、お互いにいろんなことを一緒にやっていくところから始まりかなと思います。

(落合教育長)

以前は地域ごとに学区があって、子どもたちはその地域の方にはいっていただけですけど、今は東西2学区になって広域になっているので、広いところから子どもが集まってくる。改めて地域との繋がりを考えないと、希薄になっているんですよ。そこは立て直す必要があるかなと思います。

(山口知事)

今、社会が変わってきて、私たちが育ってきたみたいに、どっかの少しでも大きな会社に勤めて、その従業員として一生終わるのは、そういうのがお互い崩れかけている。いろんなことが起きる時代だから、自分で考えて、自分で判断して、自分で行動するような子どもたちを、佐賀県は増やしていきたいなど。

ある派遣される子と話していたら、高校どこか聞いたら「佐賀西中退です」と、何で辞めたのと聞いたら「学校つまらないから」と、そのまま中国の大学に行って、何で今県職員をやっているのかと聞いたら「佐賀が好きだから」と、モデルみたいな理想的な。佐賀が好きだから、ずっと佐賀の仕事をやっていきたい。そんなのあって全然よくって、今までのように無理くり押し付けるよりも。

(飯盛(裕) 委員)

私も、西高校中退ですけど、やっぱり佐賀が好きだから戻ってきて、佐賀のために何かしたいなど。

(山口知事)

昨日来てた、企業誘致で佐賀を考えているという社長が、東大中退したらしいんだよね。何で辞めたのかと聞いたら「親には反対されたけど、もともと外交官をやろうと思った時に、東大法学部がなりやすいかなと思って入ったんで、外交官じゃなくて起業しようと方向変えたので、東大行かない。」と、そういう時代になってくるんだよね。その時に、時代遅れの子どもたちを作ってる訳にもいかないから。

(小林委員)

知事、それを県民に向けてぜひ。なかなかそこが「変わるよ。変わるよ。」と言っているけど、なかなかそこが難しくて「良い学校に、良い会社に。」保護者もお爺ちゃんお婆ちゃんも、これだけ言われていると思うけれども、お爺ちゃんお婆ちゃんがね。

(山口知事)

少しでも偏差値でみるから、ここでなかったらここにつて。序列で見えてしまう。まったく今の時代ナンセンスだから。

(小林委員)

そうそうそう、だから学校をどこに行ったって、そういうことで判断されるので、そうじゃないっていうのを。違うんですよ、違ってきているのに、もう変わらなきゃ取り残されてしまう。ずっとそこにしがみついている。

(山口知事)

佐賀県は、それに気付いてそうやって舵を切っている。

（飯盛（清）委員）

30年前の偏差値の60と、今の偏差値60は随分力が劣っている。いろんな意味での力がですね。でも、1つの学年だけでは、「自分の子は60だから」と安心するというかな。そういったのが壁としてあるみたいですね。

（山口知事）

だから、男女共同参画にしたって、意識はどうしてもあると、それが自然に本当に必要だと合点がなかなかいきにくい。いくら説明しても、でも、どうやってかやっていくしかないね。

（落合教育長）

今回のコロナでもだいぶ、東京じゃなくて地方でも働けるみたいなのが、変わってるんじゃないかと思います。

（飯盛（清）委員）

誇り高き学校づくりということで、唯一無二の情報発信になると、さっき少しで聞いていて思ったのが、私学は生徒を集めるのが至上命令といいますか、非常に大事なことで生徒募集に関してのノウハウをいろいろ持っている訳ですね。だから、県立はこれからそういったところに力を入れていくということであれば、例えば人事交流してみて、私学の教諭を1年間、県立も私学の方に1年間、案として面白いのかなと思いました。

（牟田委員）

地域の特色とか、実業系の高校とかは、なかなか移行しやすいと思うけど、普通科というのはやっぱり普通科は勉強してもらって、大学に行ってより学んでもらうから、普通科が特色を出すというのは、実は結構難しいのじゃないのかなと思うんですけどね。

（山口知事）

そこは、さっきの地域との連携とか。

（牟田委員）

まあ普通科は、「うちの高校は、制服も校則もなくって自由ですよ。」とかそういうのをやるとかね。だから普通科が唯一無二の要素を出していくというのは、結構冒険だと思います。

（落合教育長）

知恵の出どころだと思いますよね。

（進政策部長）

東京なんかは、私立の学校あれだけいっぱいあるから、それぞれ個性をどうにかして出そうとしてるから、実業系じゃないところは。そういうところが私学が少ないんですかね。そういう個性がないと埋没してしまうので。

(牟田委員)

自分が暮らしている地元が好きかっていうことが、1つあるのかなと思います。私は今でも伊万里のトンテントンが大好きで、落合教育長なんかは曳山が好きとそういうのがあって、地元の高校に行くという。未だに伊万里高校好きだから。やっぱり何か地元との文化の繋がりが無いと。

(落合教育長)

そこがしっかりしていると、1回は進学でどこか出ていったとしても、将来ですね何とか佐賀に戻りたいと、関係を持ちたいと思ってくれんじゃないのかなと。

(落合教育長)

本当に危機感をもたないと、今回の入試で半分ぐらいの学校が定員を割っている。私たちも非常に危機感をもっている。やっぱり自分たちの魅力をアピールしないと、自然に集まってくる時代ではなく、変わったのかな。

(山口知事)

経営というか全体のことを考えると、農林部とか今までただ技術を教えるという、そこだけに専念してきたけれども、それだと全体としての農業生産額が上がらないので、横で連携しながらやっていかないと。だから、先生もただ単に教えるという1つのことだけではなくて、もっと幅広くいろんなことを考えて、自らも成長していただくと。先生大事だよね。どれくらい残っているのかな。西高と東高だから全然風土が違うという。何でうちの県、そもそも東西南北なんだろう。

(落合教育長)

だいたいどこでもそうなんですかね。長崎もそうですよね。

(山口知事)

熊本県なんか濟々鬘とかあるよね。うちも元をいえば、栄城とか鹿城とかいろいろあってもよかったんだろうけど、佐賀高校を分ける時に、東西南北にしちゃったんだな。

(落合教育長)

確かに東西南北は面白くないですよ。

(山口知事)

だけど、北高とか今凄い光ってるしな。北高の人たちは凄い誇りをもってるよね。こうなるとなかなか変えられないけど。

(飯盛(裕)委員)

西高なんか、野球のユニホームに栄城と書いてありますよね。

(山口知事)

ああいうのあっていいよね。自分たちの、鹿島高校なら鹿城でもいいだろうし、何かそういう柔軟に考えてくれたらいいと思う。

（落合教育長）

確かにユニホームは、栄城とか鹿城とか。

（山口知事）

いいよね。後はさっきの予算を上手く使って、実業系の文科省の事業でいい感じで予算付けてもらっているの。

（落合教育長）

なかなかそうまとめて機材を更新できないので、ありがたいですね。

（山口知事）

農業高校とか本当に期待したいよね。今、本当に全然農業のやり方が変わってて、佐賀県は急に調子いいから。

（小林委員）

武雄の山口さんが、「農業高校でやってるのは、本当に古くて、今みんな IT 化だよ。」って。

（山口知事）

山口さんの頭の中、そういうふうに書いてあって内蔵している。名人で教えていたのを、そのままそこに入れている。

（小林委員）

東京から若い子たちが、どんどんやってくる高校ができればいいと思います。

（飯盛（裕）委員）

私、昔仕事でワシントンのアメリカンチェリーを日本に卸す作業の現場監督をやったんですけど、向こうは凄い IT 化ですよ。工場に各地からトラックがバンバン来るんですけど、バーと水洗いして、それを 1 個 1 個センサーを使って、大きさ、糖度、色の濃さとかで分けて、そこを全部機械でやって、あれを見ると手作業でやるところと IT 化の進んだところで、経済の違いが凄く分かる感じがしました。

（落合教育長）

農業の魅力を子どもたちに知ってもらうためにも、学校でもそういう新しい農業を見せないといけないですね。

（山口知事）

そうそうだから、ドローンや CAD システムなどの今のやり方に先生もついていけないといけないから大変だよ。先生も驚いたりしちゃって。

（牟田委員）

「農業は結構儲かるんだよ」ってことも教えてみたら、仕事だからちゃんと。

(山口知事)

儲かってる人は儲かってるから、そこをもっと私たちも PR していかないと。佐賀県の場合、兼業が多くてそこがだんだん代表化して法人化されていくと、そういったところはもちろん上手くいっているんで、政策的なところもあって、うちは平野に恵まれ過ぎていて、なかなか本当はそれこそドーンと大農業でやったら効率よくできるところもあるだろうけど、集約化がなかなか進んでいない。

(牟田委員)

こういうことも、学校の授業で教えているのかというと良く分からないけど、単に今後農業はどうなっていくべきなのかとか、やってるのかな。

(落合教育長)

それはやってると思います。

(飯盛(清)委員)

小学校3年生が社会科で、地元が佐賀市だったら「私たちの佐賀市」という本があって、それぞれの市町であると思いますけど、4年生だと「私たちの佐賀県」県のそれぞれのところの主たる産業とか学習をしている。小学生のお米作り体験は、わざと田植えをさせて泥だらけになって、きつい思いをさせてというのが、今までは主流でした。

(小林委員)

私たちがその体験を手作業でやってったら、農家さんが「今どきの農家は違う」と言われました。「コンバインで収穫したら、どんどんお米が獲れる様子を見せてやりたい。」と言われて、そうですね。とついつい手作業でと、苦労を教えようとしたのが間違いだったのかと。

(山口知事)

皮肉なもので、こうやってみんなお米が食べられない貧しい時代にやってきたのに、今逆に簡単に作れてしまって、今度は余ってしまうでしょ。皮肉だなと思って、だから凄い昔に比べたら本当に米作りが楽に。

(牟田委員)

さっきの私の話が、農業高校で今更儲かるとか言ってもちょっと遅い気がして、そういう子は農業を目指して来ている訳だから、それでも中学生ぐらいで、ちゃんとこういう学校に行ったらこういうことが出来て、今ちゃんと食べていけますよとか。そういうことを教えないと。

(山口知事)

本当そうだよ。それこそ産業技術学院とあるけど、ものづくり現場工学があるけど、普通高に行っただけで、それじゃ面白くないと、つい親の薦めから普通高に行ってしまうけど、結局手に何もつかなくて、だったら工業高校に行けばよかったという思いで、確かにそこって中学校の時のガイダンス難しいよね。

(進政策部長)

職業教育とか、「こういう仕事があるよ」とかいうのやってないんですか。中学校とかあるんですか。

(飯盛(清) 委員)

中学校の職場体験というのを、2年生の時にだいたいやっています。ただ今の話を聞きながら、確かうち商店とか医療関係とか IT 関係とかばかりで農業は入ってなかったなと。私の子どもが諸富中学校でお世話になった頃は、地元ということで海苔がいっぱいありました。

(山口知事)

だから、将来の大学辞めてとか話があるけど、ミッションから来てるから、そこに行こうとする訳だよね。でも、ほとんどの人は、ただ単に普通に言われた通りに、ちょっと残念だね。

(小林委員)

成績で高校を割り振られて、実業系に行きたかったけど「こんだけ点数があるんだから普通科に行ったら」と。お母さんにも、「えー」と。「本人がそう言っているのに、そっち選ばせるの。進めるの。」と言ったら、「だって、やっぱり大学に行った方がいいじゃない。」と。そうれは変わってきていて。

(山口知事)

時代が違うよ、もう。それこそ年収でやった方がいいんじゃない。農業高校なんか普通高より高いんじゃないかな。

(小林委員)

私の娘が行っている中学校のキャリア教育は、1年生の時に職業講話というのがいろんな地元の人が15人ずつぐらいいて、先生(職業講話の人)が来て地域の人を交えながらやってもらう体験をするんですね。2年生の時に職場体験があって、3年生の時には、自分が将来なりたい職業に向けてどういう進路で高校に行ったらいいのか、自分で調べて県立高校だったりとか自分たちの選びたい学校を選んだりするんですけど、その時にそういう農業は入っていなかったかなと。

(山口知事)

そのうちにやろうよ。キャリアデザイナーとかを。どうしているのかとか調べて。みんなどうやって決めているのか。

(落合教育長)

中学校で、実業系の高校から大学に行きたければ、行けますもんね。

(飯盛(裕) 委員)

私、日本で高校に1年しか行ってないんですけど、普通は2年生から理系と文系に分かれるから、だからそこで頭の中が、自分は理系に行くんだと頭になっちゃうから、そこでそっち系の大学に将来はこういう理系関係の職業に就きたいんだと、高校の早い段階で生徒たちの頭の中でこっち方向と固まっている子が多いような気がします。

(山口知事)

医者の子もって、大体医者になろうとするもんね。

(落合教育長)

親の影響が大きいんでしょうね。

(小林委員)

やっぱり理系の大学の方が就職がいいから、理系の大学に行けるように理系を選ぶという人が多い。文系の大学よりも、理系の大学の方が就職が多い。

(山口知事)

だから結局、今、風土がそうで、普通が普通でというのがなかなか厳しいのよ。IT に置き換えられる。何か手に職というか何かを持ってないと、きつい時代になっているので。

(小林委員)

就職のために大学をどう選ぶ。大学に入るために高校をどうする、とか全部未来のために、今やらないといけないことが決まってくるような感じがして、今やりたいこととか、今自分が特にやりたいということ、やりにくいのが今の子どもの教育の環境なのかなと、早いときから将来のことを余りにも言われ過ぎて。

(牟田委員)

私、教育委員会でいつも言うんですけど、昔は 15 歳が成人というか年齢的に、本当に今中学を出るくらいに、大人のことを考えられるようにした方が、いいんじゃないのかなと思うんですけど。自分の子どもを見てても、やっぱり職業選択というか、こういう仕事に就きたいから、こういうことを学びたいという発想があんまりないですもんね。ひとまず、親が言ってるように「いい高校」。もっと早く中学ぐらいから仕事をいろいろ見せるというのが大事だよね。村上龍の「13 歳のハローワーク」ああいう感じ。

(落合教育長)

あれやったら、意識するのも変わったりするでしょう。その時に、やり直しがききやすい。

(小林委員)

変わってもいいし、親も子どもが直ぐ何かやれば、「そんなの無理よ」と直ぐ言っちゃうんだけど、でも一緒に思いを描きながら変わっても、「今度はそっちに変わったんだ」とか、「いつでも応援するよ」という姿勢をやっていきたいです。

(牟田委員)

普通科から実業系の高校に転校できるのかな。

(落合教育長)

高校では県立から私立は。

(牟田委員)

やっぱり試験が必要な。普通科は普通科。

(山口知事)

もう一回入り直してもいいじゃない。それこそ部活なんかも、チェンジできたらいいよね。なかなか一旦入ると、辞めちゃいけない圧力が雰囲気。

(落合教育長)

小学校から決まってるから、野球は野球。いろいろやってもらいたいんですが。

(山口知事)

取り組みもそうだし、いろんなことで柔軟にやれるような雰囲気を作っていた方が。

(飯盛(清)委員)

どんなことが起きるか分からない時代だから、一番必要なのはどんなことになっても必要な柔軟性を、それが育てていく文科省の学習指導要領にも、そういったことも書いてありますけれども、なかなか現場はそこまで思い切ったことをやれない。

(山口知事)

うちの県職員も、今までみたいに「何課の何」、「副課長はこれをやるんだよ」と、ここに人をはめるんじゃなくて個性があるので、それぞれに合う様な組織の方を、そっちに合わせた方が柔軟だよ。なかなか長所を伸ばしていこうとやっていくというか、職員さんにしてもそうだけど、皆と上手くやろうと得意な人もいれば、突っ走って1つの物に専念して得意な人もいる。

(落合教育長)

日本の教育はどっちかという、型にはめていくという感じが非常に強かったですけれども、これから、それじゃあ日本自体が立ちいかなくなるんじゃないのかなと思いますよね。

(山口知事)

いい議論してるよ。日本教育会議だよ。

(飯盛(清)委員)

保護者の方々も、やっぱりこれから先が見通せないことはわかるんだけど、我が子には安定した職に就いてほしいという思いが強いみたいですね。

(小林委員)

結局それで困ってる子も生まれる訳ですから。柔軟にやっていかなきゃいけない。何が不満なんだろう。

(飯盛(清)委員)

うちの子には特別は起きないという、思いじゃないですかね。安定したところ。

(小林委員)

よその子がそんな風にやっていくのは、「凄いね」と応援は出来るけど、我が子になったら「えー止めてよ」と何なんですか。私は応援します。うちはいろいろしています。進路変更もする、部活も変えるんで、「あーそっちにきたか」と思いますけど、私はそれを楽しむというか一緒に応援するんですけど。

(小林委員)

それを周りは、ハラハラするみたいで。

(山口知事)

私の母は、一貫して政治家反対だったんだから。安定してないから。「何でそんな選挙なんかに出るの」と、だから出るときは黙って出たけど。本当にそれは公務員だよ。佐賀の人だから保守的やなと。

(小林委員)

そこを突っ走って、「親はそうだけど、でも自分は。」とできた人というのは、素晴らしいなと思います。そういう所も、親がもしそうでも、周りがそうじゃない。先生だったり、さっきのローカリストのメンバーだったりとかの刺激を受けてると、やっぱり親がそういう保守的でも、私がやっていきたいとなる。

(山口知事)

他の引き出しが出来てくるもんね。ローカリストに会ったりとか、小林さんに会ったりすると、「こんな自由でいいんだ」と。

(小林委員)

そんな風に考えていいんだと、思える大人に会わせてあげたいなと思います。

(山口知事)

素晴らしい。そうしよう。いろんな生き方があるから。同じ先生だけだと1つの生き方だけど、いろんな人の生き方を聞くとね。

(飯盛(裕)委員)

今、GIGA スクール構想じゃないですけど、ITが進んで学校にもビデオ会議とかできるようになってるけど、本当に学校の中だけじゃなく、いろんな業種の人たちの話を聞く機会をもっともっと増やしてとなると、本当に繋ごうと思うと直ぐ繋げるので、この日の何時にお願いしますと。

(山口知事)

そうだよ。プロジェクトEは中身が詰まっているから、いろんな人がいろんなことを言っているなと。正解を喋ってるんじゃないくて。

(飯盛(裕) 委員)

正解を見つけるのは生徒たち。「これがいい」と。

(小林委員)

何のアンケートとか忘れたんですけど、就きたい職業男子が「サラリーマン」と書いてあって、ちょっとうろ覚えで、サラリーマンで。それは、余りにも夢がないと思って。それだけ大人が見せてないんだと思って。職業がいろいろあるよってことを見せれてない結果だなと。いろんな大人の人と出会わせる。

(山口知事)

佐賀県職員、中途採用 14%いるんですよ。うちは多種多様ないろんな人生を歩んできた人たちで固めてるから、議論が面白い。

(進政策部部長)

活性化しますね。そういう視点があるかと、いろいろ出てきますから。

(小林委員)

そういうことも県民が知らなかったことかも。多様性とか言われながらも、なかなか多様性って広がっていかないし、皆自分の身の回りしか感じられないので。

(山口知事)

多様性がなかったらイノベーションは起こらない。本当にその方がいいから私たちはやっている。

(大草政策調整監)

だいたいいろんな思いがありますけど、そろそろ時間になりますので、総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。